Y26a　女性計算係の英米日比較

馬場幸栄（国立科学博物館）

イギリスのグリニッジ天文台では 18 世紀後半から、米国のハーバード大学天文台では 19 世紀後半から、日本の緯度観測所では 20 世紀前半から、女性たちが計算係として活躍していたことが知られている。これらの天文台では、いつ何をきっかけとして女性計算係が誕生したのか、また、彼女たちの業務内容はどのようなものだったのか。グリニッジ天文台では『航海年鑑』（1767 年創刊）の出版にあたって大勢の男性が暦計算を担当する計算係として雇用された。ところが、そのひとりが事故で急死すると、実際に計算をしていたのは彼の妻メアリ・エドワーズであったことが発覚した。ネヴィル・マスケリン台長は彼女を正式に計算係として採用し、グリニッジ天文台に初の女性計算係が誕生した。ハーバード大学天文台では 1877 年に台長となったエドワード・ピッカリングが、天体のスペクトル分類という当時最先端の研究を限られた予算で実施するため、女性たちを賃金の安い「計算係」として雇用し、天体の分光学的な分析・分類を行わせた。そのうちのひとりであるウィリアミナ・フレミングはのちに米国人女性初の英国王立天文学会名誉会員となった。また、彼女らの研究成果の一部は『ヘンリー・ドレーパー星表』として発表された。日本の緯度観測所では 1923 年に初めて女性が雇用されているが、その契機となったのは前年に水沢の緯度観測所が国際緯度観測事業の中央局になったことだった。世界各地の膨大な観測データを計算・分析・刊行する必要に迫られた木村栄所長は、業務の分業化・専門化を進め、女性所員たちに計算作業をまかせ始めた。ただし、その女性計算係のなかには、計算作業の傍ら報告書の編集やガラス乾板の分析を行う者もいたことがわかっている。このように女性計算係誕生の背景には各天文台における新規大型事業の導入があった。また、「計算係」という職名が女性天文学者の賃金を低く抑えるために使われることもあった。